

## はしがき

昭和43年に西日本一帯に起こった「油症」事件からすでに30年が経過した。この事件から受けたわれわれの衝撃は、その後の治療の困難な状況とともに未だに完全には癒されてはいない。残念ながら、油症事件は、教訓を残して過ぎ去った過去の出来事ではない。前例のない中毒事件だけに、事件の被害者の予後について今後も見守る必要がある。また、原因物質が究明されたことによって、油症事件は、ダイオキシン類による食中毒事件であると見なされるようになった。地球規模の環境汚染によるダイオキシン類の人体への影響あるいは環境中の生物への影響が懸念されていることから、油症研究の成果はまことに貴重である。20世紀の一時期に優れた工業製品としてもてはやされた化合物による食中毒事件は、今なお、21世紀の医療関係者、科学者、行政に携わる者、企業の研究者に引き続き現代の問題として追究することが求められている。

油症発症から30年を契機として、九州大学油症治療研究班において出版事業が企画された。これまでの油症研究が、時の経過とともに視点を変えてきたように、今後の治療と検診には現在の視点が求められる。治療研究のためにも、これまでの成果を顧みることが意義深いことである。すでに、これまでの油症の治療研究の成果は、1996年に出版された英文図書『YUSHO』に纏められている。世界に油症事件を体系的に紹介した唯一の書物として、貴重であるとともに、油症事件のすべてを網羅した書物として、高く評価されている。

この度の九州大学油症治療研究班の出版企画では、『YUSHO』の翻刻版を日本語にて出版することになった。油症研究の和書の存在についてしばしば尋ねられる背景もある。広く、わが国の医療従事者、環境化学の研究者、行政担当者、企業の研究者さらには一般の方々に、和書によって油症事件を理解していただくことの意義は大きいと考えられるからである。全世界に油症を紹介するという事業に参加して執筆されたすべての著者の方々に、この度の日本語による翻刻版出版の趣旨にご理解をいただき、ご多忙にもかかわらず執筆を快くお引き受けいただいた。また、日本語版の出版にご賛同いただき、ご支援と多くの有益なご助言をいただいた『YUSHO』の編者の方々、日本語版の出版を許可していただいた九州大学出版会に心からの御礼を申し上げたい。

本書のために、1996年以降に高い関心が寄せられるようになったダイオキシン類の内分泌攪乱作用と関連して、「ホルモン影響」と「出生性比」の問題について新たに書き起こしていただいた。また、ダイオキシン類の分子毒性機構の最近の研究状況について加えた。なお、行政と訴訟の経緯を要約された項目は、日本語版においては削除させていただいた。

本書が、油症事件で被害を受けた方々の健康と福祉を守り、人体と環境中の生物への影響が懸念されるダイオキシン類の研究の進展のためにお役に立つことを切望する。

2000年5月

編者  
小栗一太  
赤峰昭文  
古江増隆